

社会的事象への認識を広げる社会科授業づくりの工夫

～3・4年「ごみの処理と利用」の実践から～

妙高市立新井南小学校

教諭 近藤克彦

1 授業改善の視点

現在、3・4年19名（3年7名、4年12名）の担任をしている。勤務校は児童数減少に伴い、今年度より複式学級が設置された。社会科については、3・4年合同での同内容指導（AB年度方式）に取り組んでいる。本年度は、B年度に当たり、両学年とも4年の内容を学習している。AB年度方式の社会科授業は児童も担任も初めての経験であり、特に3年生については、学習参加へのハードルが高い。そのような中、複式学級における社会科授業を通じ、児童の社会的事象への認識を広げる授業改善を図った。なぜ、子ども達の社会的事象への認識を広げることを重視したのか。第1に、自学級の子どもの生活経験があまりに乏しいと感じたからである。生活経験が乏しい子ども達は、社会的事象を自分の生活と関連付けて捉えることは難しい。これでは、中学年社会科の態度目標である「地域社会の一員としての自覚や、地域社会に対する誇りと愛情をもつ」ことができない。そこで、社会科授業を通じて、意図的・計画的に体験活動を設け、子ども達の生活経験の乏しさを補完しようと考えた。第2に、自学級の子どもの達が、より良い社会の形成に参画する資質や能力の基礎を身に付けるためには、社会的事象の多面性を捉えることが必要だと感じたからである。子ども達が社会的事象の多面性を捉えることで、価値判断能力の素地が養われ、それがやがては、より良い社会の形成に参画する資質・能力へとつながるのではないかと考えた。授業改善の視点をまとめると、以下の2点となる。

- 1 体験活動の充実
- 2 社会的事象への認識を広げる学習材の活用

1では、家庭のごみ調べ、学校のごみステーション、アルミ缶つぶし、学習発表会の全校のゴミ分別、クリーンセンターや再資源センター見学を行った。2では、自学級の燃えるごみ合算資料と妙高市可燃物排出量の比較、妙高市クリーンセンターや再資源センターのごみと東日本大震災で発生した放射性残土の比較に取り組んだ。これらの取り組みを通じ、児童の社会的事象への認識を広げ、思考力・判断力・表現力を伸ばす社会科授業作りを目指した。

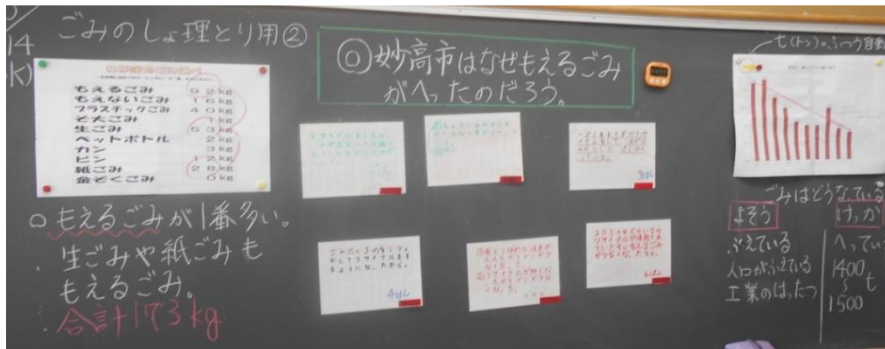
2 実践と成果（第3・4学年「ごみの処理と利用」）

ここでは、授業改善の視点の2について、実践と成果を以下に記す。

社会的事象への認識を広げる学習材の活用

(1) 実践1

第3時では、児童が各家庭で調べてきたごみを種類ごとに合算し、学級全体のデータを作成した。その結果、家庭から出されるごみの中で、燃えるごみが1番多いことを確認した。次に、燃えるごみに着目し、「妙高市全体では、この10年間で燃えるごみがどのように変化しているか。」と発問をした。自分達が調べた燃えるごみの多さや、テレビなどのメディアから得た知識をから、多くの児童が「妙高市の燃えるごみはきつと増えているだろう。」と予想した。その上で、妙高市可燃物排出量の推移を提示した。グラフの読み取りから、児童の予想に反し、妙高市ではこの10年間で、1400tもの燃えるごみが減っていたことが明らかとなった。ここで、「なぜ妙高市では燃えるごみが減少したのか。」と児童に問い、班ごとに妙高市の燃えるごみが減った理由について予想を立てさせた。児童からは、「燃えるごみをリサイクルするようになり、燃えるごみが減ったのではないか。」や、「ごみ袋が有料となり、ごみが減ったのではないか。」などの考えが出された。最後に児童が考えた予想を検証するため、どのような追究の柱を立てたらよいかを学級で整理した。「用務員さんや調理員さんへインタビューする」、「ごみステーションアルミ缶回収の様子を見学する」、「ごみが集まる場所を取材する」等の発言が聞かれた。第3時以降の学習への追究意欲を高めることができた。



第3時の板書

(2) 実践2

第13時の導入で、前時までの学習内容をパワーポイントで振り返った。児童は妙高市の燃えるごみが減ってきていること、そのごみが意図的・計画的に処理され、活用されていることを確認した。実際に自分達が学んできた授業の様子を振り返ることで、学習意欲を高めることができた。次に、既習事項を想起させながら、再利用できないごみを考えさせた。児童は前時までに、妙高市クリーンセンターで、陶器や個人で排出した灰などが再利用できないことを学習している。これに関連させ、原発事故の除染作業で発生した表土の写真から、これまで学習してきたごみ処理との違いやこのごみをもつ問題をグループで読み取らせた。写真の読み取りでは、これまでとは異質な放射性残土にばかり児童の意識が向かい、担任の予想以上に時間を費やした。また、児童が資料を比較することで予想できたと思われる、放射性残土の多さや屋外でのごみ処理、燃焼させたり、埋め立てたりしていないこと、民家の近くでごみ処理を行っていることなどを、子ども達から引き出すことに時間がかかってしまった。その後、この放射性残土が原発廃棄物であることを確認した。その上で、「ごみの多さ」、「ごみの危険性」、「ごみ問題の長期化」の3点に絞り、原発廃棄物を子ども達に紹介した。授業の終末では、再利用できるごみと再利用できないごみの違いを意識し、学習のまとめを3文で記述することができた。実践2を通じ、世の中にはいろいろなごみがあり、遠い地域で起きていると思ったその問題が自分達の生活につながっていることを、中学年なり実感させることができた。

3 成果と課題

○=成果 △=課題

実践1

- 統計グラフの数値の読み取り方や変化の捉え方、重さの単位などを全体で確認したことで、3年生も無理なくその後の学習活動に参加することができた。
- 2つの資料の比較から、認識と事実のずれが生まれ、次時以降への学習意欲を高めることができた。

実践2

- パワーポイントで既習事項をテンポ良く振り返り、子ども達の学習意欲を喚起することができた。
- 既習のごみと放射性残土を比較し、再利用できないごみについての認識を深めることができた。
- △子ども達の意識が放射性残土から、原子力発電所や放射性物質の危険性に向いてしまった。子ども達に提示する資料の検討が今後も必要である。